

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1112 号	氏 名	上 野 賢 一
論文審査担当者	主 査 樋 口 京 一 副 査 本 田 孝 行・ 加 藤 博 之		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>多発性筋炎 (PM) および皮膚筋炎 (DM) は、皮膚および筋組織の炎症により、特徴的な皮膚症状や骨格筋障害を呈する自己免疫疾患である。T 細胞を介した免疫応答による組織障害が重要な病態の背景として考えられている。治療の第一選択はプレドニゾン (PSL) だが、その減量効果と、皮膚・筋症状の予後改善効果を期待し、免疫抑制薬の併用療法が考慮される。タクロリムス (TAC) は、カルシニューリンの阻害を介して、T 細胞の活性を選択的に阻害する。今回、PM および DM の初期治療における、TAC 併用および再発後の TAC 追加に関して、臨床的有用性について後方視的に検討した。</p> <p>2003 年 7 月から 2015 年 10 月に当科で治療を開始した患者の診療録を調査し、重症間質性肺炎および悪性腫瘍合併例を除外した、66 名の PM および DM 患者 (PM 28 名, DM 38 名) を研究対象とした。PSL 単剤で治療を開始した患者群を“PSL 単独群”、初期から TAC を併用した患者群を“TAC 併用群”とした。また、PSL 単独群の中で治療経過中に再発し、TAC を追加した群を“TAC 追加群”とした。皮膚症状、血清 CK 値、PSL 投与量、徒手筋力テストにより 6 箇所筋力をスコア化した MMT-6 を調査し、各群間で比較した。</p> <p>その結果、上野 賢一は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1. TAC 併用群では PSL 単独群に比べ、PSL 初期投与量と再発頻度が有意に少なかった。2. TAC 併用群では治療開始 3 ヶ月、TAC 追加群の DM 患者では TAC 追加 1 ヶ月で、MMT-6 の有意な改善を認めた。 TAC 追加群の PM 患者は TAC 追加 3 ヶ月で、PSL 開始前の MMT-6 に比し有意な改善を認めた。3. 血清 CK は、TAC 併用群および TAC 追加群ともに、PM および DM 患者で TAC 開始 1 ヶ月後に有意な改善を認めた。また DM 患者では、TAC 併用群および TAC 追加群ともに、TAC 開始 1 ヶ月で皮膚症状の改善が得られた。4. TAC 併用群では治療開始 1 ヶ月で有意な PSL 減量効果を認めた。TAC 追加群では DM 患者で TAC 追加 1 ヶ月、PM 患者では 8 ヶ月で有意な減量効果を認めた。 <p>本研究の結果から、TAC の初期併用療法は、PSL 単独療法と比較して有意差をもって、臨床徴候を改善させるとともに PSL の減量効果をもたらすことが示された。また、PSL 単独療法では改善が得られなかった患者群でも、TAC 追加 1 年の経過で、TAC の初期併用療法と同等の治療効果が示された。以上より、TAC の併用療法は、早期寛解導入と PSL 減量に有効な治療戦略であることが証明された。よって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			